

1. 教授要目

I 文系教養科目

東工大立志プロジェクト (Tokyo Tech Visionary Project)

谷岡 健彦 教授 弓山 達也 教授 中野 民夫 教授 佐久間 邦弘 教授 他

1-1-0 1Q

新入生全員の大学生活のスタートとなる科目である。

東工大の教育は、世界をリードし、変革していく人材を生みだしていくことを目標としている。そのためには自分の専門分野の知識や能力だけではなく、広く世界を知ること、そして深く自分自身を知ることが必要である。

現代世界に存在するいかなる問題にチャレンジし、どのような問題意識を持って、自分の中の隠された可能性を開花させ、具体的に行動していくのか。科目名にもあるようにひとりひとりがいかなる「志」を立てて進んでいくのかが問われている。

本講義は講堂での大人数講義と少人数クラスでの演習を有機的に組み合わせながら、世界が抱える問題を知り、仲間との協働の中で自分も活かし仲間も活かすような場作りを学び、大学での今後の学びにつながる展望を得ていく。大人数講義では、各界で活躍するゲストスピーカーの話を聴き、いま社会で何が起きているのか、知的世界で何が問われているのかを知る。少人数クラスの演習では、グループワークを通じて自発的に考え、問題を発見し、他者と合意形成するためのスキルを修得する。演習の最終回では、各グループで立てたテーマをめぐってプレゼンテーションをおこなう。また書評執筆のワークショップを通じて、本の読み方を身につけ、本に対する批評眼を涵養する。

本講義は、リベラルアーツ教育の必修コア科目のひとつであり、そのスタート地点に位置づけられる。本講義の後に様々な分野の講義を履修し、3年次での「教養卒論」でひとりひとりの成果を総括するに至る東工大のリベラルアーツ教育は、各自の目標に向かって志を立てるプロジェクトとしてとらえることができるだろう。そのプロジェクトの出発点として、そこに必須の知的潜在力を掘り起こし、社会的視野を広げること、そして学びに必要なコミュニケーションとプレゼンテーションのスキルを高めることが本講義のねらいである。

教養卒論 (Liberal Arts Final Report)

0-2-0 3Q, 4Q

学部での教養教育の出口となる必修科目である。自身の「学びのストーリー」を描いてもらう。これまでに学んできた教養が、今後学んでいく専門科目や自身の将来ビジョンにとってどう生きてくるのか、社会にどう活かせるのか、A4用紙3枚程度にまとめる。小グループ単位で相互にレビューしながら、大学院学生の指導を受けながら執筆を進める。書いた文章を仲間に批判・添削してもらいながら仕上げることを通して、自分の考えを文章にまとめる楽しさ・苦しさを体験してもらいたい。

哲学A (Philosophy A)

國分 功一郎 教授 1-0-0 4Q

哲学を学ぶ上で大切なのは、ある哲学者が直面した具体的な問題、そして、その問題に答えるためにその哲学者が作り出した概念を実感することです。哲学者たちは一生懸命に自らの概念について説明しています。しかし、自分たちが答えようとしている問題については十分に語っているとは限りません。それは人が自分の行動の動機をうまく説明できないのと同じです。ですから、その問題を知り、実感しようと思ったら、私たち読み手自身がそれを解明しなければならないの

です。この講義では近代初頭の政治哲学を解説しながら、数人の哲学者についてそうした作業を行っていきます。取り上げるのは、ジャン・ボダン、トマス・ホッブズ、スピノザ、ジョン・ロック、ジャン＝ジャック・ルソー、デイヴィッド・ヒューム、イマニュエル・カントらの哲学者です。

講義のテーマとなるのは国家です。国家を妥当な仕方では定義するのはなかなか難しいことです。ただ、我々のよく知るタイプの国家、すなわち、近代国家を形作る概念を定義することはできます。この講義が特に注目するのは、「自然」「行政」「主権」の三つです。どれも皆さんがよく知る言葉だと思います。しかしそこには近代の政治哲学が積み重ねてきた様々な思考が見出されます。また、近代国家について考えることは、現在私たちがその中で生きている国家について考えることに他なりません。したがって、本講義を通じて、現在の政治経済を考えるために必要不可欠な知識を獲得することができます。同時に哲学についての一般的な知識も身につけることができます。

芸術 A (Art A)

伊藤 亜紗 准教授 1-0-0 3Q

本講義は、古代から 19 世紀までの西洋美術の大まかな流れを知るための導入的な科目です。パルテノン神殿、ゴシック建築、ミケランジェロ、レンブラント、マネなどの主要な作品を鑑賞しながら、西洋社会がどのような価値観を重視し、また芸術にどのような役割を期待してきたのかも考えます。教員による一方的な授業ではなく、グループワーク等学生のみなさんの積極的な参加によって授業を進めていきます。

本講義のねらいは、ふたつあります。ひとつは、西洋文化を理解する上で不可欠な基礎的教養を身につけること。もうひとつは、自分の感じたことや考えたことを説得的に伝えるコミュニケーション力も身につけることです。

文化人類学 A (Cultural Anthropology A)

上田 紀行 教授 1-0-0 2Q

文化人類学とは他文化のあり方を知りながら自文化を知る、他者を理解しながら自分自身の理解を深める学問である。本講義は文化人類学への入門であり、文化が異なるといかに私たちの考え方、世界観、行動様式が違ったものになるかを知り、自分自身のこれまでの生きてきた世界の見直しと、多様な世界への感性を養う。受講者どうしによるワーク、ディスカッションなども取り入れて、実際に他者を理解し、自分自身を深める機会を作りたい。

文学 A (Literature A)

磯崎 憲一郎 教授 1-0-0 4Q

本講義では、小説という表現形式の独自性・優位性を学ぶ。

小説は、「文字で書かれた伝達手段」でありながら新聞記事や評論とは違う、また、単なる物語（ストーリーテリング）でも、情報や教訓でもない。芸術としての小説の独自性を、音楽や映像といった他の芸術とも比較しながら、構造的に分析・検証する。

本講義のねらいは、じっさいに「小説（作品）を読む」前の準備として、学生が持っている「文学作品は難解なもの、高尚なもの」といった権威主義的な小説観を取り払い、「そもそも、小説とは何なのか？」を、自らの頭で考えさせる所にある。

歴史学 A (History A)

福留 真紀 准教授 1-0-0 3Q

この講義は、「歴史学」の入門編です。「歴史学」とはどのような学問なのか、多方面から考えます。

宗教学 A (Religion A)

弓山 達也 教授 1-0-0 4Q

本講義では宗教学の基本を学ぶ。特に現代社会における宗教の役割や機能に注目しつつ、宗教観、カルト問題、宗教と自分探しを扱う。

コミュニケーション論 A (Communication A)

中野 民夫 教授 1-0-0 2Q

「立志プロジェクト」の少人数グループワークの精神を受け継ぎ、人と人との生身のコミュニケーション能力の向上を目指す。人は社会的な生き物であり、人と人が一緒に考えたり、学んだり、創ったりすることは、私たちの根源的な欲びに通じる。今後あらゆるところで人とやりとりしながら生きていく上で、対人コミュニケーション力は不可欠である。本講義では、参加体験型のワークショップを通して、コミュニケーション力の向上を図る。

ねらいは、自己紹介、インタビュー、対話、プレゼンテーションなどの体験を通して、楽しみながらコミュニケーション上手になってもらうこと。

教養特論：多文化共生論 (Special Lecture :Social and Cultural Diversity)

佐藤 礼子 准教授 1-0-0 3Q

多文化化が進む日本の状況を知り、多様性のある社会とは何か、多様な人々が共生するにはどのようなことが求められるかを考える。文化・民族・宗教が混在する海外の事例も取り上げて考察する。講義では、異文化間コミュニケーションの概念と方法論を用いたグループワークやディスカッションを行い、異なる背景や文化をもつ人々に対話するコミュニケーション能力を身につけることを目指す。

教養特論：言語と文化 (Special Lecture : Language and Culture)

° 赤間 啓之 准教授 平川 八尋 准教授 山元 啓史 准教授 1-0-0 3Q

本講義は、言語学 A、言語学 B、言語学 C の導入科目として、学生が言語と言語学に関心をもつ機会を提供する。言語学の分野から三つ選び、それぞれの分野で興味深いトピックスを問題として取り上げ、学生の討論と実習によって講義をすすめる。統語論の回では、所有関係やアスペクトなどのカテゴリーについて議論する。音韻論の回では言語の音声と音韻をについて扱い、言語音はどのように記述されてきたのか、実際に発音することで理解する。意味論の回では、言語の恣意性や仮想動作など言語のデリケートな問題を取り上げる。

この講義の狙いは言語学に関する本質的な洞察力を身に付け、関連する言語学関係の授業科目履修の準備をし、学生がより体系的・網羅的な言語科学への第一歩を踏み出すことにある。

外国語への招待 1 (Introduction to Foreign Languages 1)

° 安徳 万貴子 准教授 三ツ堀 広一郎 准教授 市川 伸二 教授 山崎 太郎 教授

劉 岸偉 教授 戦 暁梅 准教授 河村 彩 助教 JEAN FRANCOISE MARIE 外国人教師

1-0-0 2Q

最初の二回はガイダンスとシンポジウムによる導入として、複数の担当教員が自らの体験に基づき、外国語を学ぶ意義と楽しさについて語り合い、三週目からはそれぞれの外国語を専門とする教員が、言語の背景となる文化、地理、社会、歴史などの紹介も含め、各国語についてリレー形式で講義する。(各 Q で、独・仏・中・露のうち二か国語ずつについて講義。例えば第 2 Q でドイツ語・フランス語の場合は、第 3 Q で中国語・ロシア語。)

本講義は翌年度、英語以外の新たな外国語学習を始める学生たちに、その前提となる考え方を紹介し、外国語を学ぶ面白さを伝えることを狙いとする。外国語を知ることは、自分の発想を変え、その言語を基底に成り立つ異文化に分け入っていく道のりでもある。本講義を通して、受講者は、どの言語も単なるコミュニケーションの道具ではなく、その言語圏の文化や歴史の結晶であり、それぞれの地域の人々の世界観を反映するものであると実感することになる。

外国語への招待 2 (Introduction to Foreign Languages 2)

° 安徳 万貴子 准教授 三ツ堀 広一郎 准教授 市川 伸二 教授 劉 岸偉 教授

戦 暁梅 准教授 山崎 太郎 教授 河村 彩 助教 JEAN FRANCOISE MARIE 外国人教師

1-0-0 3Q

最初の二回はガイダンスとシンポジウムによる導入として、複数の担当教員が自らの体験に基づき、外国語を学ぶ意義と楽しさについて語り合い、三週目からはそれぞれの外国語を専門とする教員が、言語の背景となる文化、地理、社会、歴史などの紹介も含め、各国語についてリレー形式で講義する。(各 Q で、独・仏・中・露のうち二か国語ずつについて講義。例えば第 2 Q でドイツ語・フランス語の場合は、第 3 Q で中国語・ロシア語。)

本講義は翌年度、英語以外の新たな外国語学習を始める学生たちに、その前提となる考え方を紹介し、外国語を学ぶ面白さを伝えることを狙いとする。外国語を知ることは、自分の発想を変え、その言語を基底に成り立つ異文化に分け入っていく道のりでもある。本講義を通して、受講者は、どの言語も単なるコミュニケーションの道具ではなく、その言語圏の文化や歴史の結晶であり、それぞれの地域の人々の世界観を反映するものであると実感することになる。

法学（憲法）A (Law (Constitutional Law) A)

松村 芳明 非常勤講師 1-0-0 3Q

【概要】

日本国憲法に関する基礎的な講義を行います。開講回数の関係上、対象分野は憲法総論及び人権が中心となります。憲法の基本原理である近代立憲主義の観点から憲法の意義や役割を確認するとともに、個別の規定の解釈論を検討します。

【ねらい】

講義や学修を通じて自分なりの憲法観を獲得し、社会に生起するさまざまな憲法上の問題を自ら考える上で拠り所となる視座をもつこと。身の周りに存在する人権問題への鋭敏な感覚とともに、政治や行政を監視し、主体的に政治プロセスに携わる市民としての能力や資質を涵養すること。

法学（民事法）A (Law (Civil Law) A)

金子 宏直 准教授 1-0-0 2Q

日常生活に係る法律の問題、契約、不法行為、消費者保護、裁判の仕組みなどを分かりやすく学ぶ。留学生と各国の法律事情について理解を深めるために英語の教材やディスカッション等も行う。

政治学 A (Political Science A)

中島 岳志 教授 1-0-0 4Q

本講義は現代日本におけるナショナリズム問題について考察する。まずナショナリズム論の最前線の議論を講義し、その後、具体的な現象について映像・音楽・マンガなどを使用しながら解説する。ポイントは「不安型ナショナリズム」。社会が流動化し、安定的な社会基盤が失われる中、なぜナショナリズムが歪な形で勃興するのかを考える。さらに「不安型ナショナリズム」現象と連動するセカイ系アニメの分析、秋葉原事件のような無差別殺傷事件の分析を通じて、現代の

不安を性質を内在的に理解し、その政治的解決法を考察する。

本講義のねらいは3つある。一つはナショナリズムについての基礎知識を身につけること。二つ目はナショナリズム勃興の背景となる現代社会の特徴を把握すること。三つ目はその解決方法を政治学的に考えること。その過程で、受講生自身が「いかに生きるのか」という問いを深めることを期待する。

国際関係論 A (International Relations A)

川名 晋史 准教授 1-0-0 2Q

なぜ、日本と米国は「同盟」関係にあるのか。なぜ、日本には米国の基地が存在するのか。そしてそれが沖縄に集中しているのはなぜか。本講義は、戦後日米関係のレンズをとおして様々な Whys を捉えていく。さらに、それらを今日の国際情勢（時事問題）と関連付けることで、国際政治と国内政治が抱える相克、日米の外交・安全保障政策の課題を浮かび上がらせる。

本講義のねらいは、受講者が国際関係論やグローバル・イシューに関心をもち、それを主体的に学習するための問題意識を涵養することにある。

心理学 A (Psychology A)

永岑 光恵 准教授 1-0-0 3Q

本講義では、心理学入門として心理学の歴史から最近の研究成果にわたって概説する。特に、多岐にわたる分野の中から知覚、記憶、感情について取り上げる。併せて、心のメカニズムについての仮説を立て、実証していく心理学的な研究方法（実験や調査）についても講義する。

講義では、グループワークやグループディスカッションなども取り入れて、「人間とは何か」「人間の心とは何か」を考察し、人間理解を深めることを目的とする。

教育学 A (Pedagogy A)

(平成 30 年度は休講)

未定 非常勤講師 1-0-0 4Q

一般に、私たちが「小学校」や「中学校」と呼んでいる「学校」とは、法的には学校教育法第一条で定められた、いわゆる「一条校」に属する学校である。しかし実際には、さまざまな理由から一条校に通うことができない人々や、一条校以外の学びの場を必要としている人々のための「学校」でも教育が行われてきた。特に近年、人権意識の高まりや人々の価値観の多様化、日本社会の多文化化などを背景に、一条校の枠を超えた「学校」へのニーズが一層高まってきている。そこで本講義では、主として一条校の認定を受けていない「学校」をとりあげ、その社会的意義や課題、政府や行政の対応、そこに通う人々の思いなどに触れることを試みる。

本講義のねらいは、次の3点である。まずひとつめは、さまざまな「学校」の存在を知ること、我々が持っている「学校」や「教育」に対するイメージを相対化することである。ふたつめは、そのような「学校」の実践に触れることで、日本社会がたどってきた歴史や現状、今日的課題を教育の観点から捉え直すことである。最後は、ますます多様化する教育ニーズへの理解や他の受講者との意見交換を通じて、これからの「学校」や「教育」のあり方を「教育を受ける権利」の観点から再考することである。

なお、学生によるディスカッションや発表を中心に進めるため、事前の課題学習、及び事後のコメント提出を必須とする。

社会学A (Sociology A)

西田 亮介 准教授 1-0-0 2Q

社会学の基本的な考え方を理解し、その思考法をとおして、現代社会についての理解を深める。また、その背景としての社会学史について、理解する。

教養特論：現代社会の課題とコミュニケーション(Special Lecture : Social Issues and Communication)

岡田 庄生 非常勤講師 1-0-0 3Q

本講座は、株式会社博報堂の現役社員のリレー講座形式で行われる。地域創生や環境問題、食の問題など、現代社会を取り巻く様々な課題をアイデアやコミュニケーションで解決している新しく具体的な最新事例を扱う。

授業形式は、講師からの一方的な解説ではなく、グループディスカッションや質疑応答を通じて、様々な視点や知識を講師が提供する。なぜなら、主体性や協調性を高めることが、現代社会の課題を解決する上で益々重要になってくるからである。

本講座のねらいは、現代社会の課題に取り組む上で重要な3つの力、すなわち ①問いを立てる力 ②構想を描く力 ③行動を創る力 を身につける事である。この3つの力を知ること、今後どのような課題に対応するときでも、自分なりに課題を探り、ビジョンを描き、実践へと踏み出すための思考の基礎となる事が期待される。

(株式会社博報堂は国内2位の大手広告会社で、広告コミュニケーション領域を中心に企業や社会の課題解決を行っている。2005年に流行語大賞にも選ばれた環境省「クールビズ」キャンペーンなど、様々な現代社会の課題解決の実績を持つ)

経済学A (Economics A)

未定 1-0-0 4Q

この講義は予備知識の有無にかかわらず、経済学に関心のあるすべての学生を対象としている。講義ではミクロ経済学、マクロ経済学、そして計量経済学の初歩知識を扱う。ミクロ経済学は家計や企業など個々の主体を扱う分野であり、マクロ経済学はGDPや失業率といった国全体の経済現象を扱う学問である。また、計量経済学は経済理論から出発し、立てられた仮説の妥当性を実際のデータを用いて検証する学問である。いずれも具体例を用いて、より現実に近い観点から経済学の基本を学んでいく。

学生たちは日常生活における様々なものごとに対して、経済学者の身になって、考えてもらえるように導くのが本講義の目標である。

教養特論：ファッション論(Special Lecture: History of Fashion)

高村 是州 非常勤講師 1-0-0 4Q

現代社会において、衣服は単に身体を守る物ではなく様々な役割を担っている。

本講義ではファッションがどのようにして生まれ、社会の中で発展し、これからどのようにしていくのかを学び、「ファッション」という概念について一緒に考える。衣食住という言葉があるように、「衣」は人間の生活において根幹に関わる部分でありながら、自己の全身を自ら見るができないため、客観性を欠きやすい分野である。しかし、自分を視覚的にプレゼンテーションしていくことは社会生活を送る上で重要であり、その一助としてのファッションの活用方法についても考えていく。

統計学A (Statistics A)

毛塚 和宏 講師 1-0-0 2Q

近年、ビッグデータの隆盛とともに統計学が注目されつつある。なぜなら、ビッグデータを含む、人や社会を対象にしたデータを取り扱うには、統計学の知識や素養が必要であるからである。

本講義は、社会科学における統計学の応用を取り上げながら、統計学の基本的な概念（記述統計、相関、回帰、検定・推定など）を解説する。本講義を通じて、履修者は統計学の基本的な概念を身に付け、それら駆使して社会問題にアタックする能力を養うことができる。

科学史 A (History of Science A)

多久和 理実 講師 1-0-0 4Q

本講義は、科学史を現代の科学を取り巻く状況を相対化する視点として提供する。

科学知識を学び研究する上で、科学活動をよく知る必要がある。現在当然のように受け入れられている科学活動（科学者という職業が存在すること、理論と実験が両輪となって進歩すること、学会で成果を発表すること、など）は昔から当たり前だったのだろうか？そうでなければ、どのように生じてどのように当たり前になったのだろうか？現在価値が置かれているものを相対化することで、変わり続ける「科学」という分野で活動し続けていくための視点を育む。

技術史 A (History of Technology A)

中島 秀人 教授 1-0-0 4Q

この授業では、科学技術と社会の間に起こる諸問題を議論する。そして科学技術を将来専門とする立場からこのような問題にどのように取り組むべきかを論じる。

科学技術社会論・科学技術政策 A (Science and Technology for Society A)

調 麻佐志 教授 1-0-0 2Q

科学や科学的事実とはどのようなものと考えることができるのか。その「事実」の形成に研究者や論文がどう作用しているのか。翻って、「事実の形成」という観点から、研究者にはどのような行動が求められるか。そのような問題に関する入門的な内容について講義する。

本講義のねらいは、

- (1) メタな視点から科学を見る
- (2) 研究の内容だけでなく研究者の役割や責任について基本的自覚を持たせる
- (3) 科学技術社会論への関心を高める

の3つである。

科学技術倫理 A (Ethics in Engineering A)

札幌 順 教授 1-0-0 3Q

科学技術と社会・環境との関係を歴史的・多面的に考察し、現代の高度科学技術社会における科学者・技術者として重視すべき価値を共有する必要性を理解する。科学者・技術者が直面する可能性のある倫理問題を疑似体験し、倫理的意思決定の手法を学ぶ。科目全体を通して、「やってはならない」ことを強調する予防倫理だけでなく、科学者・技術者として「何ができるのか」を考える志向倫理を重視する。また、倫理的科学者・技術者が、社会の福利に貢献するだけでなく、自らの「よく生きること (well-being)」を高めることができることを理解する。

科学哲学A (Philosophy of Science A)

田子山 和歌子 非常勤講師 1-0-0 4Q

本講義は、17, 18 世紀ヨーロッパにおいて発展した自然科学の方法論を、科学思想史（キリスト教思想史、哲学史も含む）のコンテキストから扱う。

本講義は、1. 「自然法則」、「実験と経験」、「経験主義」、「時間・空間」、「進歩」など、近代自然科学の方法論ないし基礎テーマを、各授業でテーマごとに扱い、かつ、2. それらのテーマに通底する、科学と宗教の関係をめぐる文化的・歴史的基盤を概観することをねらいとする。

社会モデリングA (Social Modeling A)

岩井 淳 非常勤講師 1-0-0 3Q

本講義では、社会的な意思決定過程をモデルするための基礎技法を提示する。主要な論点として、社会的選択理論の構成概念について講義する。社会的選択理論は、個人の選好を集会的決定に結びつける方法を分析する理論的な枠組みであり、コンドルセの投票のパラドクスやアローの不可能性定理に関連している。本講義の内容は、意思決定における情報基盤の問題にも関連する。本講義のねらいは、社会的意思決定に関する概念的理解を得る機会と、この領域における独立した研究的関心を育むような機会を、受講生に提供することである。

意思決定論A (Decision Making A)

猪原 健弘 教授 1-0-0 2Q

意思決定論における重要な意思決定問題を取り上げ、解決策、解決策の利点や欠点、そこから得られる示唆を、ディスカッション、グループワーク、講義、演習を通じて検討する。

意思決定論が扱う意思決定問題の代表例と解決策、および、意思決定論の基本概念と基礎的な知見を理解・修得させると同時に、意思決定論への興味を喚起することが本講義のねらいである。

言語学A (Linguistics A)

°平川 八尋 准教授 山元 啓史 准教授 1-0-0 4Q

言語学の入口として、私たちが日々触れている言語の具体的現象を取り上げて、そこにはどんな言語の不思議が詰まっているのか、身近な経験を言語の科学として楽しむ授業を行う。予備知識は不要。必要なのは言語に向き合う素直な態度と食欲な好奇心だ

教養特論：ライティングスキル (Special Lecture : Writing Skills)

°山元 啓史 准教授 平川 八尋 准教授 0-1-0 1Q, 2Q, 3Q, 4Q (H30 年度 2Q 開講。1Q, 3Q, 4Q 休講)

論文・レポートの形式、決まり事を学ぶだけでなく、どうすれば、論文・レポートができるのか、その執筆計画、日頃の考えの蓄積、積み上げ方、整理の仕方、まとめ方について、グループで話し合い、実際に自分で簡単な実験を行い、その内容をまとめる体験を行う。

学びのデザイン (Learning Design)

°室田 真男 教授 田中 岳 教授 森 秀樹 准教授 渡邊 雄貴 准教授 1-0-0 2Q

大学入学前までの学びと、大学での学びは何がどう異なるのだろうか。大学で学ぶことの意味や、大学生の目指すものは何か。この講座では、大学生の学びを学習科学・教育工学・認知心理学の諸理論を用いて理論的に考える力を養う

ことを目的に講義する。大学生生活4年間だけでなく、社会人として、「学ぶ」方法や、「教える」方法についても触れながら、自らの今後の学習についてデザインできる能力を養う。

Special Lecture: Technology and art (教養特論：技術と美術の哲学)

BEKTAS YAKUP 助教 1-0-0 4Q

メディア論 A (Media Studies A)

柳瀬 博一 教授 1-0-0 4Q

本講義では、「メディア」の意味と意義について学ぶ。

通常、「メディア」というと、テレビ、新聞、雑誌、ラジオ、映画、書籍、広告など「メディアビジネス」を連想する向が多い。けれども、今や、インターネットの発達、SNS やブログなど個人メディアサービスの浸透、パソコンやスマートフォンの普及で、あらゆる個人と組織がいつでもどこでも情報発信できる「だれでもメディア」時代が訪れている。この「だれでもメディア時代」を支えるのは IT や AI などの「理系の技術」である。

理系の技術が牽引する「だれでもメディア」時代。この時代における、メディアの意味は、意義は、何か？ 自らがメディアとなった個人は、組織はどう振る舞うべきか。具体的な事例をとりあげながら、考察する。

表象文化論 A (Studies of Culture and Representation A)

北村 匡平 准教授 1-0-0 2Q

表象文化論とは、美術史や哲学、文学や人類学など個別の専門領域を横断しながら「表象」としての文化現象を捉え返す、脱領域的な学問である。本講義では、「見ること」に深く関わる近代以降の文化について、テーマごとに考えてみたい。具体的には、「崇高」という美学的カテゴリーから精神史としてのマニエリスム、東西の建築様式から造園術、博覧会からディズニーランド、身体文化史からハリウッドのセレブリティ文化まで、幅広く議論していく。ただし、基礎的な設置科目であることを考慮し、なるべく平易な言葉で解説する。

授業では、さまざまなヴィジュアル・イメージを見ながら、人びとの創造的営みを通じて文化を考察していく。受講者には、分析対象となるイメージについて主体的に思考し、グループで意見を交わしてもらう。したがって、積極的な議論への参加が期待される。本授業の目標は、①表象文化論という学問を愉しむこと、②横断的に文化現象を捉える方法を身につけること、③現代の諸現象に対して歴史的な視点を持てるようになることである。

人間文化論 A (Human Studies A)

未定 1-0-0 4Q

「人間」は、人間との関係だけでなく、さまざまな「他者」と関係においてはじめて「人間」たり得る存在である。

本講義は、「かかわりのなかの人間存在」を古今東西の詩歌を扉に、人が自己と、他者、自然、あるいは超越的存在と、どのような関係を切り結んできたかを考える。

また、口語自由詩の創作も行う。

哲学 B (Philosophy B)

國分 功一郎 教授 2-0-0 1Q

誰かに謝る時、あなたは能動的でしょうか？ それとも受動的でしょうか？ 能動的だという人がいるかもしれませんが。ですが、謝る時に重要なのは、過ちへの気づきや自らの行いへの悔いといったものが、自分の心の中に現れてくることで

す。これは人が能動的に、やろうと思って出来ることではありません。では謝罪は受動的なのかということ、そうとも思えません。誰かに謝る時、人は謝罪という出来事を単に受動的に経験しているわけではないからです。我々はあまりにも能動／受動の区別に慣れ親しんでしまっているため、それを必然的で、普遍的で、不可欠なものと考えています。ところがよくよくこの区別を眺めてみるならば、それはむしろごちなく、「不自然」なもの、少なくとも我々の周囲で起こっていることを記述するにはあまりに不十分なものであることが分かってきます。この講義は能動／受動の対立を疑問視することを出発点としつつ、古代の言語の中にあった、「中動態 middle voice」という文法カテゴリーを様々な観点から検討していきます。ベースとなるのは哲学ですが、その他、言語、歴史、政治、医療、倫理など様々な分野が取り上げられます。

私たちが現在、どのような言語を用いて思考しているのかを反省的に考察し、その言語と結びついた諸概念および諸問題を自覚することが本講義の狙いです。具体的には、私たちが頻繁に用いる概念、「意志」「責任」「行為」「選択」「権力」等々が論じられます。自分たちが用いている言語について考察することは、自分たちの思考の様式そのものを考察することに他なりません。そしてこの作業はどんな分野の学問を学ぶにあたっても必要とされることです。

芸術B (Arts B, Esthetics B)

伊藤 亜紗 准教授 2-0-0 2Q

本講義では、キュビズムからポップ・アートまで、20世紀美術の代表的な作品を鑑賞します。アートの鑑賞に正解はありません。アートを楽しむ第一歩は、作品を見て自分がどう感じたかを率直に言葉にすること、そして、それを他者と共有し深めていくことです。したがって本講義は、学生のみなさんが能動的に鑑賞するグループワークや簡単な作品制作を行うワークショップを積極的に行います。そうした活動を通じて他の学生の見方を知り、作品を多角的に捉えることができるようになるでしょう。そのうえで講師が、当時の時代背景などを含めた必要な知識を提供します。

本講義のねらいは、ふたつあります。ひとつは、アートを鑑賞する力を身につけることです。ふたつめは、20世紀美術の代表的な作品についての知識を身につけることです。この鑑賞力と知識があれば、今後どんな展覧会に行っても楽しめるようになるはずです。また、鑑賞の訓練をつむことで、自分の考えを説得的に伝えるコミュニケーション力も身につくはずです。

文化人類学B (Cultural Anthropology B)

吉田 ゆか子 非常勤講師 2-0-0 4Q

文化人類学は、世界各地における現地調査を実施し、暮らし方の細部から社会の成り立ちまで様々なレベルのデータを収集しながら、人間の文化・社会生活の多様性や複雑性を明らかにしてきた。我々はこの学問を通して、世界の多様な文化や価値観にふれ、自身がこれまで当たり前としてきた事柄を一度見直し、新たな人間観や世界観を得ることができる。本講義では、講師自身のインドネシアでの調査経験も紹介しながら、「家族」「ジェンダー」「国家」「観光」「人とモノの関わり」等のトピックをとりあげ、関連する文化人類学の主要な議論を検討する。この講義のねらいは、①文化人類学の特徴を理解すること②受講者自身が会おう様々な文化的事象に対し、文化人類学的な視点で考えられるようになることである。

文学B (Literature B)

磯崎 憲一郎 教授 2-0-0 3Q

本講義では、古典から近代小説、日本の現代小説まで、個々の作品を「読む」事を通じて、「小説とは何か？」を学ぶ。

小説の起源まで遡り、古典から近代小説、現代小説まで見渡した上で、個々の作品の特徴を捉え、「小説という表現形式でなければ出来ない事を始めたのは、いつの時代の、どの作家からだったのか？」を具体的に考察し、「小説とは何か？」

実作者でもある担当教員の考え方を示して行く。文学史的位置付けや、マッピングといった客観的分析ではなく、小説本体に寄り添い、「この作品を書いている最中に、作者は何を企み、どんな頂きを目指していたのか？」を考えながら、より能動的に、個々の小説を読み込んで行く。

歴史学B (History B)

福留 真紀 准教授 2-0-0 3Q

この講義では、「人」から歴史学を考えます。歴史を紡ぎだしているのは「人」です。
美術史・考古学・文学・思想史の視点にも触れながら、「人」にこだわって、分析していきます。

宗教学B (Religion B)

弓山 達也 教授 2-0-0 2Q

本講義では1980年代後半のバブル期から東日本大震災(2011年)までに見られる日本のスピリチュアル文化を理解することを目的とする。特にスピリチュアリティと社会との関係に重きを置き、スピリチュアルブームとその背景、若者の死生観、大衆文化に見られるスピリチュアリティを扱う。

コミュニケーション論B (Communication B)

中野 民夫 教授 2-0-0 3Q

本講義は、簡単な正解のない様々な課題に対して、多様な人々が「協働」で取り組むことが求められる時代に、人と人が対面して話し合うコミュニケーション力を高める。自ら良き話し手、聴き手になるだけではなく、人々が集い話し合う場を適切に創り、円滑に進行していく「ファシリテーション」の基本技を身につける。

ねらいは、今後のチームでの研究活動など、様々な人が協働する場に活かせる生身のコミュニケーション力を、楽しいワークショップ体験を通じて向上させること。

法学(憲法)B (Law (Constitutional Law) B)

松村 芳明 非常勤講師 2-0-0 2Q

憲法(学)に関する基礎的で最重要の知識事項の解説を行う講義である。具体的には、立憲主義や憲法の歴史、憲法改正、平和主義、権力分立等の、専門的には「憲法総論(統治機構含む)」と呼ばれる領域についてとり上げた後、人権の概念や人権保障の基本的なあり方等の「人権総論」領域についてとり上げ、最後に「人権各論」領域に移ることになる。

本講義の狙いは、憲法の最も基本的で重要な事項について受講者が理解に達することである。また、現実の諸問題と学問との架橋も副次的な狙いとしている。

なお、本講義は教職等で必要になる「憲法」科目に対応するものである。

法学(民事法)B (Law (Civil Law) B)

金子 宏直 准教授 2-0-0 4Q

民法や民事裁判手続法を含めた、民事法について基本的な学習を行う。法律を学習するのに必要となる六法の使い方も身につけることで、将来、自分の仕事に関連する法律の理解にも役立てることができる。

政治学B (Political Science B)

中島 岳志 教授 2-0-0 2Q

政治学の基礎について、現代思想の成果を取り入れ、論じる。理論的側面を講義した上で、具体的な現代社会の課題について論じる。政治学とは、異なった能力・価値観・意見・慣習をもった他者同士が、ひとつの場所でいっしょにやっていくための方法を考える学問である。重要なのは自分とは異なる他者の存在を前提とすること。他者とわかりあうことは、そう簡単なことではない。時にもどかし、時にイライラする。しかし、何とか合意形成しなければ、社会の秩序を保つことはできない。では、どうすればいいのか。その試行錯誤の軌跡と思考を講義し、現代社会への展望を論じる。

本講義のねらいは2つある。一つは政治学の基礎を習得すること。二つは現代社会の課題に対して、政治学的解決の方法を身につけること。この能力を身につけることで、異なる他者との共存のあり方を模索することが可能となる。

国際関係論B (International Relations B)

川名 晋史 准教授 2-0-0 1Q

今日、全ての国家は主権の上では平等ということになっているが、歴史的にみれば、そのような世界秩序のあり方は普遍的ではない。そこで本講義では、われわれが今日考えるような「国際関係」がいつどのような形で始まり、どのような推移を経て今に至っているのかを考えていく。とりわけ、戦後冷戦の中心舞台であったヨーロッパにおいて、米ソの勢力争いは何をめぐってどのように行われたのか。またその冷戦に大国がどのように関わり、それをどのように克服しようと試みたのか。こうした観点から、米ソの大国間政治の相互作用の過程を分析する。

本講義のねらいは、「現在」を普遍のものだと考える固定的な視座を打ち砕くことにある。

心理学B (Psychology B)

永岑 光恵 准教授 2-0-0 2Q

本講義では、心理学の多岐にわたる分野の中から主に知覚、記憶、学習、感情、性格、社会行動について取り上げる。教員による一方向的な授業ではなく、グループワークやグループディスカッションを講義内で多く取り入れ、他者とのコミュニケーションを通じて、「人間とは何か」「人間の心とは何か」を考察し、人間理解を深めることを目的とする。また、関心をもった分野毎にグループを形成し、グループワークに取り組み、その成果を全受講生の前でプレゼンテーションする機会もあり、各自の関心分野をより深く掘り下げることも可能である。

教育学B (Pedagogy B)

(平成30年度は休講)

未定 2-0-0 1Q

平和教育のマンネリ化が指摘されるようになって久しい。一方、祖父母の世代ですら戦後生まれとなった現代の子どもたちにとって、先の大戦の記憶に思いを馳せることはますます難しくなっている。戦争体験者がひとりもいなくなってしまう時代を目前に控え、私たちは戦争の記憶と平和への願いをどのように継承していくことができるのだろうか。そこで本講義では、沖縄戦に翻弄されたひめゆり学徒隊の記録を手がかりに、その痛みの記憶を、元学徒や彼女らとともに活動してきた戦後世代がどのように伝えてきたのか、またメディアは「ひめゆり」をどのように表象してきたのか、といった点を中心に検討を行う。その後、受講者自身が受けてみたいと思えるような、戦争の記憶を伝える平和学習のためのショートプログラムの作成・発表を行う。

本講義のねらいは、端的には「平和」という概念を捉え直すことであるが、具体的には次の3点を目指したい。まずひとつめは、ひめゆり学徒隊の事例を通して、沖縄戦の実相とその継承活動への理解を深めることである。ふたつめは他者の記憶の表象可能性とそこに孕む政治性への意識を高めることである。最後は、プログラム作成を通じて自らの問題意識をかたちにする作業を経験することである。

なお、学生によるディスカッションや発表を中心に進めるため、事前の課題学習、及び事後のコメント提出を必須とする。

る。

社会学B (Sociology B)

野田 潤 非常勤講師 2-0-0 4Q

我々がふだん「当たり前」「常識」と思っていることの中には、思いがけない「非・当たり前」「非・常識」が潜んでいる。社会学は、身の回りの事象をより広い社会の文脈に置くことで、ものの見方を増やしてくれる学問である。講義では、以下の2点に重点を置きつつ、社会学的に考えるための物の見方とその方法を養っていく。

(1)社会学における基本的な概念や理論，方法を習得する

(2)身の回りの様々なトピックに関して具体的なデータや事例を取り入れながら，社会学的な視点を学ぶ

教養特論：現代社会論 (Special Lecture: Contemporary Society)

池上 彰 特命教授 2-0-0 1Q

憲法や安保，日米関係，メディアリテラシー，イスラムやアメリカ大統領選挙，北朝鮮など現代に生きる学生たちに，社会に出てから必要とされる現代社会の認識力を身につけてもらうことを一義的な目標とする。

経済学B (Economics B)

未定 2-0-0 3Q

本講義は，経済学の根幹をなすミクロ経済学を紹介する。ミクロ経済学は，個人や企業など個々の経済主体の意思決定とその相互作用を扱う。例えば価格や所得の変化が個人の消費行動にどのような影響するか，市場において価格や需給はどのように決まるかなどである。さらに，個々の経済主体の意思決定やその相互作用を明らかにすることで，市場の機能，産業の形成，政府の政策や経済の国際化の影響等を分析する。

本講義のねらいは，経済学的な考え方の基礎を身につけること，それを通じて，社会の様々な経済的な事象や政策に対する関心を高め，分析的に考えられるようになることである。

現代ジャーナリズムB (Journalism B)

未定 2-0-0 1Q

(平成30年度は休講)

教養特論：国際社会とコミュニケーション (Special Lecture: International society and Communication)

未定 2-0-0 3Q

統計学B (Statistics B)

平野 敏弘 非常勤講師 2-0-0 4Q

本講義では，実際に観測された標本に基づいてデータの背後にある母集団の情報を引き出す「推測統計学」を中心に統計学の基礎を学ぶ。

講義内容には，記述統計・確率・確率分布（二項分布，正規分布等）・推定・検定・回帰分析などが含まれる。これらは数理統計学，機械学習，計量経済学などを学習する際の基本的な知識となる。本講義のねらいは，確率分布に基づいたモデルを用いて推定・検定といった統計的推測を行うことで，データを生み出した背後の構造を推論できるようになることにある。

科学史 B (History of Science B)

多久和 理実 講師 2-0-0 3Q

本講義は、科学史を古代から現代までの歴史の流れとして提供する。そして、物理学・化学分野を中心にそれぞれの時代に生きた科学者を取り上げる。

歴史上の科学者たちに接する身近な機会は、単位や法則の名前（例えば「ケプラーの法則」など）であろう。そこで、まずはよく知られている科学者を起点として、彼らの業績や教育の影響を線として結ぶことで歴史としての流れを作る。それと同時に、科学の歴史は単純な一本線ではなく、現在には残っていないが当時信じられていた学説や当時影響力を持っていた学者がいたことを指摘する。現代の科学のルーツを知ると同時に、現代の科学に繋がる要素だけを遡って歴史を描くことがよいのかどうかを考える。

技術史 B (History of Technology B)

中島 秀人 教授 2-0-0 4Q

この授業では、19 世紀後半以降科学と技術がどのように融合して科学技術となったかを議論し、科学技術とは何かを明らかにする。また、20 世紀の産業社会がどのように歴史的に形成されたかを知ることで、21 世紀の科学技術のあるべき姿を考える基礎を得る。

教養特論：大学史 (Special Lecture: History of Universities)

° 亀井 宏行 教授 未定 2-0-0 3Q

私たちの学ぶ東工大とは、どのような大学か考えるための科目である。130 年を超える東工大の歴史をつくった人々とその成果にかんする講義を聴き、キャンパスの関係の地を探訪しその産み出したモノに触れ、その歴史を学び、その未来について考える。東工大の歴史を通じて、科学・技術の専門家をめざす東工大生が、日本の科学・技術の未来について、それぞれに考える。

科学技術社会論・科学技術政策 B (Science and Technology for Society B)

調 麻佐志 教授 2-0-0 1Q

科学者の社会的責任とは何だろうか。今後の科学技術のガバナンスはどうあるべきか。専門家と市民の科学コミュニケーションはどうあるべきか。さまざまな事例をもとに考えるのが本講義である。将来の自らの研究成果の社会への影響に関心のある理系の学生、そして自然科学の個別の学問領域を越えて、外交や国際関係、法律そして社会制度の関係する複合領域の問題（科学技術のガバナンス）に関心のある文系の学生、双方に開かれている。

本講義のねらいは、

- (1) 自らの研究成果が社会へ与える影響に関心を持つ人材を育成する
- (2) 外交や国際関係、法律、そして社会制度などが関係するような複合領域の問題に対するアウェアネスを高めることである。

科学技術倫理 B (Ethics in Engineering B)

札野 順 教授 2-0-0 2Q

科学技術と社会・環境との関係を歴史的・多面的に考察し、現代の高度科学技術社会における科学者・技術者として重視すべき価値を共有する必要性を理解する。科学者・技術者が直面する可能性のある倫理問題を疑似体験し、倫理的意思決定の手法を学ぶ。科目全体を通して、「やってはならない」ことを強調する予防倫理だけでなく、科学者・技術者とし

て「何ができるのか」を考える志向倫理を重視する。また、倫理的科学者・技術者が、社会の福利に貢献するだけでなく、自らの「よく生きること (well-being)」を高めることができることを理解する。加えて、組織において科学者・技術者がいかに行動すべきかを 具体的な事例をとおして検討する。

科学哲学B (Philosophy of Science B)

東 克明 非常勤講師 2-0-0 3Q

前提が正しいとき必ず結論も正しい推論を、演繹的推論という。演繹的推論は 20 世紀に数学的に形式化され、大いに進歩した。今日、形式化された演繹的推論を扱う学問は論理学と呼ばれる。本講義では論理学の入門的内容を扱う。前半では命題論理、後半では述語論理について、それぞれの形式言語、日本語文の形式化、推論規則と演繹、そして完全性や健全性といったメタ論理について学習する。

論理学は、現在ではコンピュータの正確な理解にとって不可欠である。また、そのような実践的側面に加え、論理は人間の合理性、科学の合理性にとって不可欠の要素である。本講義では論理のエッセンスを学び、論理に関わる哲学的問題について、技術的内容を伴った理解ができるようになることを目指す。

意思決定論B (Decision Making B)

猪原 健弘 教授 2-0-0 1Q

競争的意思決定状況を数理的に扱うための理論である非協力ゲーム理論の基礎と、そこから派生したさまざまな理論を、ディスカッション、グループワーク、講義、演習を通じて取り扱う。

非協力ゲーム理論の基礎的枠組みとしての「標準形ゲーム」、「展開形ゲーム」、「繰り返しゲーム」、そして、非協力ゲーム理論から派生した理論である「メタ ゲーム理論」、「コンフリクト解析」、「ハイパーゲーム理論」、「ソフトゲーム理論」についてのさまざまな概念の数理的な定義と分析方法を与えることで、各枠組みや理論の特徴を理解させることが本講義のねらいである。

社会モデリングB (Social Modeling B)

岩井 淳 非常勤講師 2-0-0 4Q

本講義では、社会的意思決定過程のモデルに関する基本理論を提示する。主要な論点として、社会的選択理論の重要定理について講義する。本講義の内容は、民主主義、意思決定支援、厚生主義、帰結主義に関する議論を含む。講義では様々な投票手法の紹介も行う。そのいくつかは高度情報時代において魅力的である。

本講義のねらいは、社会的意思決定に関する主要な理論を学ぶ機会と、この領域における独立した研究的関心を育むような機会を、受講生に提供することである。

言語学B (Linguistics B)

°平川 八尋 准教授 山元 啓史 准教授 1-1-0 2Q

言語に向き合う経験を積んだら、次は、ことばを分析してみよう。どうしてことばの使い方にはルールがあるのか、ルール（文法）を（意識的には）知らなくても話ができるのはなぜか、ルールを知っていても外国語になると母語のように話せないのはなぜか、文法、語彙、意味、それぞれには、まだまだ知らないルールがたっぷり含まれている。それをみんなでディスカッションしながら、見つけてみよう。きっと誰かに話してみたくなるだろう。

国際文化論：アジア・アフリカ（Intercultural Studies: Asia and Africa）

°三ツ堀 広一郎 准教授 鈴木 真弥 非常勤講師 工藤 裕子 非常勤講師
崔 盛旭 非常勤講師 藤田 梨那 非常勤講師 勝畑 冬実 非常勤講師
佐久間 寛 非常勤講師 小澤 一郎 非常勤講師 2-0-0 1Q

グローバル化の時代にあつて忘れられがちな国際社会の諸相に案内する。具体的には中国、韓国、インド、インドネシア、イラン、エジプト、西アフリカの7カ国（7地域）に焦点をあわせながら、各国文化の民族性、歴史、伝統、社会などを概観する。各地域の専門研究に従事する7人の講師が、それぞれ独自の切り口から、オムニバス形式でこの7地域をあつかう。

本講義のねらいは、異文化理解の促進と国際意識の醸成である。一連の講義を通じて得た知識は、履修者が将来、多様な文化的出自の持ち主たちが集まるグローバルな環境で生きることになったときに、かならずや力になるだろう。

国際文化論：ヨーロッパ・ラテンアメリカ（Intercultural Studies: Europe and Latin America）

°三ツ堀 広一郎 准教授 小笠原 能仁 非常勤講師 河村 英和 非常勤講師
土田 久美子 非常勤講師 伏見 岳志 非常勤講師 エウニッセ・スエナガ 非常勤講師
宮崎 淳史 非常勤講師 梶田 裕 非常勤講師 2-0-0 2Q

グローバル化の時代にあつて忘れられがちな国際社会の諸相に案内する。具体的にはドイツ、フランス、イタリア、ロシア、チェコ、メキシコ、ブラジルの7カ国に焦点をあわせながら、各国文化の民族性、伝統、歴史、社会などを概観する。各地域の専門研究に従事する7人の講師が、それぞれ独自の切り口から、オムニバス形式でこの7地域をあつかう。

本講義のねらいは、異文化理解の促進と国際意識の醸成である。一連の講義を通じて得た知識は、履修者が将来、多様な文化的出自の持ち主たちが集まるグローバルな環境で生きることになったときに、かならずや力になるだろう。

世界文学1（World Literature 1）

°三ツ堀 広一郎 准教授 劉 岸偉 教授 戦 暁梅 准教授 市川 伸二 教授
山崎 太郎 教授 安德 万貴子 准教授 河村 彩 助教 JEAN FRANCOISE MARIE 外国人教師
2-0-0 3Q

この講義で、学生は世界文学の主要な作品を鑑賞する。講義はまず「世界文学とは何か」を皮切りに、ドイツ、フランス、ロシア、中国の文学作品をオムニバス形式の授業で鑑賞する。

世界文学を読むことによって、学生は世界文学の読み方を学び、各国民・民族の思考法や心性を理解し、更に文学を通じた異文化理解の仕方を獲得することができる。

世界文学2（World Literature 2）

°三ツ堀 広一郎 准教授 劉 岸偉 教授 戦 暁梅 准教授 市川 伸二 教授
山崎 太郎 教授 安德 万貴子 准教授 河村 彩 助教 JEAN FRANCOISE MARIE 外国人教師
2-0-0 4Q

この講義で、学生は世界文学の主要な作品を鑑賞する。講義はまず「世界文学とは何か」を皮切りに、ドイツ、フランス、ロシア、中国の文学作品をオムニバス形式の講義で鑑賞する。

世界文学を読むことによって、学生は世界文学の読み方を学び、各国民・民族の思考法や心性を理解し、さらに文学を通じた異文化理解の仕方を獲得することができる。

教養特論：オペラへの招待 (Special Lecture: Introduction to Opera)

山崎 太郎 教授 2-0-0 1Q

オペラは歌とオーケストラ、舞台美術と衣装、言葉と演技といったさまざまな要素が一体となって、愛と死をめぐる人々の情念と社会の複雑な様相を描き出す総合芸術である。視覚と聴覚の相乗効果には何ものにも代えがたい魅力があり、それゆえに 16 世紀末の誕生以来、貴族社会から市民社会へのヨーロッパの歴史の変遷において、娯楽と教養の対象として発展を続け、現在、世界的な舞台芸術としての地位を確立するにいたっている。本講義では代表的な作品をいくつか紹介。各作品をさまざまな角度から掘り下げ、その魅力に親しむことで、現代の私たちにとってオペラが持つ意味を考え、ひいてはヨーロッパの社会と文化の成り立ちをより深く理解するための一助とする。

オペラといえば欧米で主に富裕層のために上演される豪華な芸術であり、日本に住む学生にはあまり縁がないと一般的に思われているが、今日の日本でもさまざまな上演が行なわれ、時には学生のための特別な価格設定がなされていたりする。またオペラは何よりもテレビドラマや映画と同様、人間たちの織り成す関係や喜怒哀楽の感情を描くドラマであり、演出によってはそれが(オリジナルのト書きとは違う)現代の舞台装置や衣装という設定で示されたりもして、きわめて身近なものと感じられることもある。授業を通じて、このようなオペラの多様な在り方を紹介し、ヨーロッパの伝統文化への理解を深めるとともに、現代の私たちが生きる社会におけるオペラの意義を考えてゆきたい。

教養特論：日本文化入門 (Special Lecture: Fundamentals of Japanese Culture)

(平成 30 年度は休講)

DE FERRANTI HUGH 教授 2-0-0 3Q

教養特論：身体教養科学 (Special Lecture: Physical Activity)

林 直亨 教授 福岡 俊彦 教授 丸山 剛生 准教授 小谷 泰則 助教 2-0-0 2Q

身体や身体活動は我々の日常生活を支える重要なものである。本講義では、身体に関わる様々な現象・事象を紹介し、それらの意義や、背後にある生理的・工学的・心理的・社会的なメカニズムについて考えてみる。

身体や様々な活動に人知の及ばない素晴らしさがあることを確認し、それらの意義を考え、メカニズムを紐解く一助としたい。

教養特論：科学とヒューマニズム (Special Lecture: Science, Literature, and Humanism)

BEKTAS YAKUP 助教 2-0-0 2Q

メディア論 B (Media Studies B)

柳瀬 博一 教授 2-0-0 3Q

本講義は、現代メディアの基礎知識を学んだ上で、科学技術に対するメディアとジャーナリズムの報道の意義について考察する。

21 世紀は科学技術が主役となりやすい時代である。地球環境、医療、経済、社会や政治やエンタテインメントにいたるまで、科学技術が関わらない分野はほとんどない。

科学技術そのものや科学技術がもたらした事象はメディアの取材対象になる。さらに、科学技術に関わる者はメディアを介して一般に向けた発言や説明を積極的に求められる。

ゆえに、科学技術の道を歩む者は、研究畑で仕事をするにせよ、産業界に身を投じるにせよ、メディアビジネスの一員となるにせよ、科学技術をメディアはどう封じるべきか、という命題に向き合うときがいずれ訪れる。

本講義では、現代メディアの基礎を学んだのち、現実起きた科学や技術にまつわる事故や事件などの報道を取り上げ

て、科学や技術とメディアとの関わりについて考察する。また、科学技術の当事者が情報発信を行う、「科学技術ジャーナリズム」の基礎についても学ぶ。講義には、実際に科学技術報道に従事する現役メディア関係者やジャーナリストを招く予定である。

表象文化論 B (Studies of Culture and Representation B)

北村 匡平 准教授 2-0-0 3Q

20 世紀において娯楽として絶大な影響力をもった映画は、「映画スター」という特殊な表象を生み出した。スクリーンで輝きを放っていた「映画スター」はやがて、戦前・戦中期／占領期において、国民を主体的に軍国主義／戦後民主主義に包摂するための文化装置として利用され、人びとの振る舞いや思考を規定する決定的な役割を担った。また映画が斜陽化する一方で、高度経済成長期に家庭へと浸透していったテレビは、(映画スターとは異なる仕方)でアイドル／アーティストを生み出した。そのような日常生活に深く根差したメディアで構築される有名性も、現代の文化産業においては不可欠な存在である。

本講義では、メディアに媒介されることによって、名声を獲得してきた女性(スター女優、女性アイドル／アーティスト)に焦点化し、その表象の歴史を概観する。到達目標は、①「スター」を歴史的に捉えながら 20 世紀の映像史を理解すること、②同時代の社会・文化における集合的欲望の様態からジェンダー規範の変遷を理解すること、③映画、雑誌、テレビ、パソコン、モバイルなどで構築される有名性や私たちが生きるメディア文化を理解することである。

人間文化論 B (Human Studies B)

未定 2-0-0 3Q

人間文化 (Human Studies) とは何かを考えるにあたって、文学者、思想家、宗教者などの言葉は、大変有益な道標になるが、非言語の表現を中心に据えた芸術家たちの言葉もまた、特異な意味と価値を有している。

本講義では、人間文化の生成において、「美」のはたらき、「美」のちからが、どのような役割を担ってきたか、古今東西の絵画、音楽、彫刻などさまざまな分野の芸術家たちの言葉を読みながら考察する。

また、美をめぐる随想の執筆も行う。

哲学 C (Philosophy C)

國分 功一郎 教授 2-0-0 3Q

哲学研究の基礎は読むことです。書かれたテキストを読み、それが扱っている題材だけでなく、その背後にある概念の網の目までつかみ取らなければなりません。そのためには、普段なら見落としてしまうような、ちょっとした言葉遣いにも気を遣う必要があります。この講義では、ドイツに生まれ、アメリカで活躍した哲学者ハンナ・アレントのテキストを読みながら、それを実践していきます。扱うのは彼女の論文集『過去と未来の間』(みすず書房)に収められた「自由とは何か?」という論文です。この論文でアレントは自由がいつも「意識の自由」と同一視されてしまうことを批判しつつ、独自の自由論を展開しています。アレント哲学への入門として最適な文章です。論文のコピーを配布し、一言一句を読み、解説していきます。

論文は古代から現代にまで至る長い期間を扱っているので、幅広い知識を身につけることができます。哲学者は彼(女)が実際に書いたこと以上のことを考えている——これを実際に読みながら体験してもらいたいと思います。そうした体験は様々な場面に応用できるはずです。

芸術C (Arts C, Esthetics C)

伊藤 亜紗 准教授 2-0-0 1Q

本講義は、科学技術を用いたさまざまなアート表現を通して、身体がもつ役割や未来の身体のあり方について考えます。バーチャルリアリティ、人工知能、遺伝子技術など最先端のテクノロジーを用いたアートを鑑賞してそれについて議論したり、障害者の身体についての講義をうけたあとで、講義中に数回、自分の作品を制作ないし立案する機会があります。本講義のねらいは、三つあります。一つめは、科学技術を用いたさまざまなアートに親しむこと。二つ目は、技術の進歩が身体観や倫理観に与える影響について理解すること。三つめは、アート作品の試作や立案を経験することです。

文化人類学C (Cultural Anthropology C)

上田 紀行 教授 2-0-0 2Q

「苦悩と解放の人類学」-人間は誰もが幸せになりたいと望んで生きている。しかし私たちは多くの苦悩に直面しながら生きる存在でもある。

人間にとっての苦悩とはいかなるものか、文化が違えば苦悩の形も違うものなのか、それとも人類に共通の苦悩の形があるのか。日本社会に特有の苦悩はいかなるものなのか。そうした人間にとっての苦しみを前半では扱う。

後半ではその苦悩からの解放を論じる。私が長年論じてきた、人間にとっての「癒し」とは何か。宗教は人間の解放を導くのか。祭や儀式などのパフォーマンスの開く世界はいかなるものか。人間はなぜアートを必要とするのか。

様々な文化における苦悩の形、そしてそこからの解放の形を知ることは、人生にとって有益な体験となることだろう。また講義形式だけではなく、参加型のワーク、ディスカッション等も頻繁に行われるので、活発な参加が期待されている。

文学C (Literature C)

磯崎 憲一郎 教授 2-0-0 2Q

本講義では、学生が短編小説を執筆し、授業内で発表・批評し合う。

初回・第2回の授業で担当教員自身の小説観や執筆法、過去に発表した作品について説明した上で、第3回目以降は学生自らが執筆した短編小説を授業内で発表・批評し合う。議論の中で、「創作の楽しさ・難しさ」を共有すると同時に、「小説に内在する力」や「小説を生成する原理」、更には芸術作品を生み出すために必要な「創造的思考」「オリジナリティー」についても考える。

歴史学C (History C)

福留 真紀 准教授 2-0-0 4Q

この講義のテーマは、日本の対外関係史です。取り扱う時代は中近世です。

このころの日本の外交のかたちについて、考えてみたいと思います。

宗教学C (Religion C)

弓山 達也 教授 2-0-0 1Q

本講義では日本人の死生観を理解することを目的とする。そのため世界的に有名な日本映画を取り上げ、小レポートや議論によって、その映画に見られる死生観を見極めていく。扱う映画は滝田洋二郎監督「おくりびと」、加藤久仁生監督「つみきのいえ」(2008年)、小津安二郎監督「東京物語」(1953年)、北野武監督「HANA-BI」(1998年)である。

法学（憲法）C（Law (Constitutional Law)C）

辻 健太 非常勤講師 上田 宏和 非常勤講師 2-0-0 2Q

この講義では、まず、憲法の背景にある立憲主義の理念とその歴史について解説する。そのうえで憲法における重要な人権や統治の基本的な仕組みにおいて、立憲主義の理念がどのように活かされているのかを説明する。

憲法の基本原理をおおむね理解した上で、身の周りで生じるさまざまな憲法問題を自分自身で考える力を涵養することをねらいとする。

法学（民事法）C（Law (Civil Procedure Law) C）

金子 宏直 准教授 2-0-0 4Q

民事裁判の手続法として、民事訴訟法、民事執行法等を学習する。弁理士試験科目などの民事訴訟法に該当する。

本科目の目的は、社会の中で必ず発生する紛争を、裁判によりどのように解決することができるのかを、民事訴訟法を学習することにより理解することにある。民事裁判制度がどのような仕組みで、どのような法理論により組み立てられているのかを理論的に学習することができる。民事紛争解決には裁判だけではなく代替的紛争解決手続の学習、民法で学習した権利義務が裁判ではどのように取り扱われるかを学習することができる。

法学（民事法・知財）C（Law (Intellectual Property Law) C）

金子 宏直 准教授 太田 昌隆 講師 安形 雄三 非常勤講師 菅野 智子 非常勤講師

井口 加奈子 非常勤講師 岡本 守弘 非常勤講師 辻河 哲爾 非常勤講師

廣瀬 しのぶ 非常勤講師 小川 憲久 非常勤講師 梶山 敬士 非常勤講師

小倉 秀夫 非常勤講師 2-0-0 3Q

東京工業大学で知的財産法を体系的に学習することができる唯一の科目である。東工大 0B や知的財産実務で活躍する弁護士等の専門家も加わり、基礎的な内容から実践的な内容へのつながりを、民法の財産法から各知的財産権法まで順次学習していく。担当予定（金子宏直、安形雄三、太田昌孝、菅野智子、井口加奈子、岡本守弘、辻河哲爾、廣瀬しのぶ、小川憲久、梶山敬士、小倉秀夫）。平成 27 年度までの総合科目「先端科学技術と知的財産権」の後継科目である。複合領域コース「科学技術と知的財産権コース」科目である。

研究者、エンジニアを将来のキャリアに予定している学生の方も多と思われるが、研究や製品開発を行うには多額の資金が必要になる。こうした資金を獲得するために重要な役割を果たすのが知的財産権（特許等）である。発明等により知的財産を作り出すだけでは、資金につなげることができない。特許権などの知的財産権を取得し、それを有効に利用することが必要になる。この知的財産権の取得、利用活用に携わる主な専門職が、弁理士である。東工大の卒業生には多くの弁理士が活躍している。弁理士数（出身校別平成 24 年統計）によると東京工業大学 47 名（全 837 名中）5.8%にも及ぶ。科学技術と知的財産権の関係について理解を深め、科学者、技術者として必要な知識を深めるとともに、弁理士などを目指す学生にも有益な学習の機会を提供することが狙いである。

政治学 C（Political Science C）

中島 岳志 教授 2-0-0 1Q

近代日本の政治・外交とナショナリズムの関係について講義する。特に精神史の観点を導入し、日本が積極的に全体主義へと傾斜して行った過程を論じる。明治国家は「一君万民」をテーゼとし、王政復古による封建制打を目指したが、誕生した政府は一部の藩出身者が行政を独占する藩閥政治だった。この体制に対する「第二の維新」を目指す武装闘争・言論闘争が、超国家主義の源流を生み出す。さらに明治後期に入ると、富国強兵・殖産興業といった国家目標に自己同一化

できない悩めるエリート青年（煩悶青年）が登場し、精神上、新しい時代を迎える。そして、彼らの中から昭和維新テロ・クーデターを主導する超国家主義者が誕生する。本講義では文学作品や社会現象も分析の対象とすることで、「八紘一宇」というヴィジョンに人々が魅かれて行ったプロセスを論じる。このプロセスを辿ることは、現代日本を相対化することに通じる。講義では、現代社会への視座を意識し、歴史の中から問題の本質を抽出する方法を論じる。

本講義のねらいは3つある。一つ目は、近代日本政治が歩んだ道筋を的確に把握すること。二つ目は日本が全体主義へと傾斜して行ったプロセスを説明できるようになること。三つ目は、超国家主義者となっていた人物の内在的批評を通じて、現代社会と共通する不安の問題を考察すること。この能力を身につけることによって、現代日本の政治を論じる視座を獲得する。

国際関係論 C (International Relations C)

川名 晋史 准教授 2-0-0 1Q

本講義では、国際関係を捉える基本的な理論枠組であるリアリズム、リベラリズム、コンストラクティビズムについて考察していく。そしてそれらを第二次世界大戦後の具体的な事象の説明に適用し、理論の射程と限界を明らかにすることで、国際関係の構造と多元性を炙り出そうとする。

そのねらいは、第一に、複雑な国際関係を理解するための相対的な視点を養うことにあり、第二には、理論と実際の反復作業をつうじて、応用範囲の広い問題解決型の思考を形成することにある。

心理学 C (Psychology C)

永岑 光恵 准教授 2-0-0 4Q

本講義では、ストレス科学を主に心理生理学的側面から取り上げる。避けたい、減らしたいと考える「ストレス」について、ストレス科学の歴史から振り返り、最新のストレス研究成果を紹介する。また、体験的にいくつかのストレス軽減方法も講義内で行う。

講義を通して、ストレスやストレス管理に関する新たな考え方を獲得し、日常生活に活かせるようにすることを目的とする。

教育学 C (Pedagogy C)

(平成 30 年度は休講)

未定 2-0-0 1Q

「識字」とは、文字を読み書きする能力のことである。とりわけ教育が行き届いていない開発途上国では、文字の読み書きができないために貧困の連鎖から抜け出せずにいる人々が少なくない。そのため世界では、途上国に対するさまざまな教育支援が行われている。しかし先進国が途上国に対して行う支援の中には、先進国の価値観に基づく「開発」の押し付けに過ぎないとの批判の声があることにも注視する必要がある。また UNESCO は、グローバリゼーションの進行に伴い、世界で方言や少数言語の消滅が進んでいることを警告している。そこで本講義では、識字教育を糸口に、ことば＝文化に関する複数のトピックを、映像資料やデータを用いつつ紹介する。またそれらのトピックに対する考察を踏まえ、望ましい支援のあり方についても検討を試みる。

本講義のねらいは、次の3点である。まずひとつめは、識字教育に対する理解を深めることである。ふたつめは「ことば」の問題を、文化的多様性と政治性の観点から捉え直すことである。最後は他者を支援することについて考察を深めることである。

なお、学生によるディスカッションや発表を中心に進めるため、事前の課題学習、及び事後のコメント提出を必須とする。

社会学C (Sociology C)

西田 亮介 准教授 2-0-0 1Q

本科目は、日本社会の民主主義とその啓蒙プロセス、それらの課題と展望を検討する。とくに、投票年齢の引き下げと市民性教育を取り扱う。

さらに日本社会が民主主義や政治に向き合った/向き合わざるをえなかった時代の知見を、現代の、そして今後の日本の民主主義の維持、発展にどのように活用するかという問いを検討する。

現代社会論C (Contemporary Society C)

未定 2-0-0 3Q

(平成30年度は休講)

経済学C (Economics C)

未定 2-0-0 3Q

本講義では基本的な動学的マクロ経済モデル、特に世代重複モデルを解説する。

ほとんどの国で世代間所得移転政策が実施されている。例えば、賦課方式の年金制度では若年世代から老年世代への所得再分配が行われることになる。これらの政策は世代間での利害対立を引き起こし、また経済活動に対して重大な影響を及ぼしている。本講義では、経済政策の厳密な分析手法の修得を目標として授業を進める。

統計学C (Statistics C)

毛塚 和宏 講師 2-0-0 4Q

社会学や政治学の分野でもちいられる計量分析の基礎を学ぶ。統計学的思考の特質、記述統計・仮説検定・相関・様々な回帰分析(線型、ロジット、その他)の理論を学ぶと同時に、統計ソフト「R」を用いた分析手法を修得する。そのねらいは、社会・政治現象に関わるマクロデータ・ミクロデータから重要な情報を引出し、因果的推論に基づく研究手法を身に付けることにある。

科学史C (History of Science C)

矢島 道子 非常勤講師 佐藤 賢一 非常勤講師 2-0-0 1Q

本講義は、毎火曜日に行われる第一部(数学史)と毎金曜日に行われる第二部(生物学史・地質学史)の2つの部分に分かれている。

第一の部分の概要は以下の通りである。

近代以前の東アジアの数学史を概説する。前半は古代・中世の中国数学を講義し、後半は近世日本の数学史を講義する。近代以前の東アジアに存在した数学を概観することで、現代数学に繋がる近代西洋数学との対比を考察するための素材を提供する。

第二の部分の概要は以下の通りである。

古代から現代に至る科学の歴史をたどってゆくと、16、17世紀からだんだんと近代化され、現代化されていくのを理解する。さらに、それぞれの時代で科学が社会の中でどんな位置にあったかも理解する。また、女性が科学の中でどんな位置にあったかということも考えていきたい。こうした試みをつうじて、科学の時間軸(歴史性)と空間軸(社会性)を形成し、科学の「いま」への理解を深めていく。

技術史C (History of Technology C)

中島 秀人 教授 2-0-0 2Q

この授業では、科学技術史の事例、あるいは科学技術と社会の間に起こっている問題の事例を取り上げ、グループに分かれて調査し、発表討議を行う。

科学技術社会論・科学技術政策 C (Science and Technology for Society C)

調 麻佐志 教授 2-0-0 2Q

科学技術社会論の問題にクリティカルシンキングを適用して考える訓練を行う。そのために多面的な理解が求められる複雑なトピックを取り上げ、一回はそのトピックに関する概略を講義し、もう一回は学生間のディスカッションに当てて授業を進める。

本講義の狙いは、

- (1) 科学に対して批判的な見方を論理的に表現すること
- (2) クリティカルシンキングの技法を使うことを

を経験し、学ぶことである。

科学技術倫理 C (Ethics in Engineering C)

札野 順 教授 2-0-0 1Q

科学技術と社会・環境との関係を歴史的・多面的に考察し、現代の高度科学技術社会における科学者・技術者として重視すべき価値を共有する必要性を理解する。科学者・技術者が直面する可能性のある倫理問題を疑似体験し、倫理的意思決定の手法を学ぶ。科目全体を通して、「やってはならない」ことを強調する予防倫理だけでなく、科学者・技術者として「何ができるのか」を考える志向倫理を重視する。また、倫理的科学者・技術者が、社会の福利に貢献するだけではなく、自らの「よく生きること (well-being)」を高めることができることを理解する。加えて、組織において科学者・技術者がいかに行動すべきかを具体的な事例をとおして検討する。責任ある研究・開発活動も、本科目の重要な要素である。

上記の目的に加え、本科目では、科学技術倫理に関連する事例を自ら調査・分析し、その結果を報告する能力の育成も目指す。

科学哲学 C (Philosophy of Science C)

小山田 圭一 非常勤講師 2-0-0 1Q

科学についての哲学的問題には様々なものがある。科学の目的とは何か、科学の対象とは何か、科学の方法とは何か、科学的知識とは何か、科学とは何か、などの一般的な問題がある一方、物理学や化学、生物学などの個別科学においても哲学的に考察すべき問題が多々ある。本講義では、そうした様々な問題のいくつかについて、その背景とそれに対する既存の見解を紹介し、それらをできるかぎり理論的・体系的に考察する。その上で、最善の解答あるいはこれまでもより良い解答があるかを探りたい。

科学に携わる者が、何を対象に、どんな方法で、そしてまた何を目的として科学的な実践を行うのか、そうしたことについて素朴に考えるだけでなく、より厳密かつ整合的な考察が可能になるよう、観点、問題、材料を提供し、それらを基に科学についてより深く考察するための普遍的な素養を身に付けることを目的とする。

意思決定論 C (Decision Making C)

猪原 健弘 教授 2-0-0 2Q

集団意思決定状況を数理的に扱うための会議の理論の基礎概念を、ディスカッション、グループワーク、講義、演習を通じて取り扱う。具体的には、「シンプル ゲーム」、「会議」、「提携の強さ」、「会議のコア」、「整合的な提携」、「意思決定主体の許容範囲」、「許容ゲーム」、「提携の望ましさ」、「安定な提携と安定な代替案」、「仮想許容範囲」、「後悔のない代

替案」，「会議のコアの特徴づけ」を検討する。

会議の理論の基礎概念を理解し，それを他者に伝える能力を涵養することが本講義のねらいである。

社会モデリングC (Social Modeling C)

大堀 耕太郎 非常勤講師 穴井 宏和 非常勤講師 2-0-0 1Q

本講義では，複雑な社会課題を理解し，解決するための方法論について解説する。具体的には，ゲーム理論，メカニズムデザイン，複雑ネットワーク分析，マルチエージェントシミュレーションなどの人間の心理や行動を扱う理論と方法，さらには社会課題の解決に有用な人工知能（AI）技術について解説する。

社会システムのモデリングから施策や制度の設計および評価，という社会システムデザインに関する一連のプロセスについて理解することが本講義のねらいである。

言語学C (Linguistics C)

赤間 啓之 准教授 山元 啓史 准教授 1-1-0 1Q

言語学Cでは脳神経言語学を中心に，関連する認知言語学，統計言語学(自然言語処理)まで概観する。脳の構造・機能を通じて言語を捉えようとする科学の歴史から説き起こし，先人達がどのような測定方法で言語機能の神経基盤を解明してきたか，特に機能的磁気共鳴画像法(fMRI)に重点を置きつつ紹介する。現代言語学の重要なテーマである，言語習得，多言語併用，言語障害(失語症)，意味処理，記憶・知覚・運動・情動などについては，基本から最近の研究動向まで紹介する。また脳神経言語学の研究に必須な計算プログラミングについて，導入的な解説を行う。更には担当者が管理運営を行っている生命理工学院・機能的磁気共鳴画像法(fMRI)施設を利用し，脳神経言語学の実験とデータ解析に必要な実験計画法，統計解析など様々な手法について導入的な授業を行う。

学生は言語と脳についての科学に触れることで，人間に関する教養と研究の基本的スキルを身につけることができ，この研究分野の楽しさ，難しさに気づくことができる。人間理解が深まることで，高度な情報社会，科学技術社会で生きてゆく際に自分にとっての羅針盤を作る上で一助となりうる。

教養特論：日本思想史 (Special Lecture: Intellectual History in Japan)

畑中 健二 助教 2-0-0 1Q

過去から現在の，日本に展開した思想について論ずる（「そもそも『日本』とは，『思想（史）』とは何か？」も議論の対象に含まれる）。講義全体の視点となるテーマを一つ定め，それに沿って歴史上のいくつかのトピックに焦点をあてる。

「日本思想史」という領域には，多くの文化研究や地域研究と同様に，「これを学べばこと足りる」というような特定のディシプリンは存在せず，代わりに個々の主体的取り組みとその対話があるといってもよい。そこでは，したがって，当たり前のこととしての領域横断的な学修と，互いの研究を理解・批判するコミュニケーション能力が求められることになる。

こうした特性をリベラルアーツの一環としての本講義にも活かし，日本の思想・歴史に関する理解の深化を通して，既存の枠組みに囚われすぎないような，広く応用可能な思考力を身につけることをねらいとする。

教養特論：メディア心理学 (Special Lecture: Media Psychology)

岩男 征樹 助教 2-0-0 3Q

本講義は，メディア心理学の入門編である。メディア心理学とは，日常生活の中で我々がメディアを用いていかにやり取りしているかを質的方法により明らかにする領域である。心理学では1990年代より質的方法を用いた研究が増えてきた。質的方法とは研究者が自ら現場に向かい，コミュニティに参加してやり取りし，体験を通じて実践の特徴を明らかに

する方法である。それらの研究はワークプレイスの研究として始まったが、2000 年代になってより身近なファンコミュニティの研究も始まった。

本講義では事例として仕事場、アニメヲタク、アイドルヲタクなどを取り上げ、ディスカッションを通じて、メディア使用やコミュニティの特徴について考察を深めていく。

それらの検討を通じて、メディア心理学の基本的な考え方について理解を深めると同時に、他者と関わりながら学術的知見や経験、理論を踏まえて、自分なりの意見や解決法を導き出す力を身につけていく。

教養特論：テキスト解釈論 (Special Lecture: Text Hermeneutics)

(平成 30 年度は休講)

未定 2-0-0 1Q

教養特論：スポーツ科学 (Special Lecture: Sports Science)

林 直亨 教授 丸山 剛生 准教授 2-0-0 1Q

スポーツの競技力向上には、様々な科学・技術が貢献している。ここでは、運動生理学と、バイオメカニクスとに関連する事象を取り上げ、それらの科学の基礎的な概念との関連を扱う。すなわち、身体が出力するエネルギー量を抑制するために、効率よく運動する手法を発見するバイオメカニクスと、身体が出力できるエネルギー量を増加させるために、発揮できる力・持久力を向上させる運動生理学とが、どのように競技力向上と関連したのかについて考えていく。

教養特論：人間関係論 (Special Lecture: Human Relations)

齋藤 憲司 教授 安宅 勝弘 教授 2-0-0 3Q

本講義では、現代社会における人間関係の諸相や社会と人間において生じる様々な課題に、臨床心理学および精神医学的観点からアプローチする。人間科学、精神科学に独自の的方法論とその思想、理念を論じるとともに、対象となる人間の多様性を紹介する。各種資料を用いながら、人間のあり様および関係性について検討し、出席者とともに考察を進めていくことで、科学的・客観的な思考に加えて、個別性や主観性をも尊重しうる態度を構築していくことをめざす。具体的には、青年期にある自身を振り返り、どのような人間関係の中で育ち、支えられ、時に葛藤してきたかを臨床心理学の見地から検討・考察するとともに、現代社会の大きな関心事である「こころの健康」について、精神医学の立場から多角的に考えていく。

本講義のねらいは、ひとつには、よりよい理工人としてのあり方と対人ネットワークづくりについて実習を通じて修得していくことであり、もうひとつには、人間関係、すなわち他者や社会との関わりという観点についての洞察を深めていくことである。

人文社会学系ワークショップ (Workshop on Humanities and Sociology)

(平成 30 年度は休講)

未定 2-0-0 3Q

よりよく書くことと、友人の書いたものをよりよくするレビュー活動とに主眼をおきつつ、自身の「学びのストーリー」をまとめてもらう。

これまでに学んできた教養が、今後学んでいく専門科目や自身の将来ビジョンにとってどう生きてくるのか、社会にどう活かせるのか、A4 用紙 2 枚程度にまとめる。小グループ単位で相互にレビューしながら、また、大学院学生の指導を受けながら執筆を進める。書いた文章を仲間に批判・添削してもらいながら仕上げることを通して、自分の考えを文章にまとめる楽しさ・苦しさを体験してもらいたい。

教養特論：ジェンダー (Special Lecture: Gender)

野田 潤 非常勤講師 2-0-0 3Q

性別とは、最も「自然」「常識」と思われがちなテーマのひとつである。本講義では、性別に関する私たちの「当たり前」が、いかに当たり前ではなく「不思議なこと」なのかについて、身近なトピックを用いながら考えてゆく。講義ではジェンダーにまつわる基本的な概念や理論を習得し、現代日本社会の性別に関する諸問題を学んでゆく。その際には量的データ・質的データの双方を用いつつ、歴史社会学や比較社会学の視点も取り入れてゆく。最終的には性別に関するさまざまな社会問題を論じつつ、そうした諸問題に対応するための知識や思考、物の見方を養っていく。

受講者には本講義を通じて、(1)性別そのものがいかに社会的に規定されているか、(2)性別に関する身の回りのさまざまな問題がいかに社会的な問題とつながっているのかを理解してもらいたい。同時にこれらのプロセスを通じて、(3)「社会」に対する感受性を深めてもらうことも期待する。

教養特論：音楽 (Special Lecture: Music)

(平成 30 年度は休講)

未定 2-0-0 1Q

教養特論：オンライン学習コース概論 (Special Lecture: Introduction to edX online course creation)

CROSS JEFFREY SCOTT 教授 1-0-0 1Q

教養特論：オンライン学習コース制作実習 (Special Lecture: Introduction to online course video creation)

CROSS JEFFREY SCOTT 教授 0-1-0 2Q

教養特論：都市の表象 (Special Lecture: Urban Space in Literature and Cinema)

木内 久美子 准教授 1-0-0 3Q

近代化の発展とともに、世界は急激な都市化を遂げてきた。この過程で人々の「日常生活」(ルフェーブル)のあり方や、人々が都市に対してもつイメージはどのように変化してきたのか。都市生活や都市空間を描出した文学作品や芸術作品をとおして、これらの点を明らかにしつつ、都市化に伴う今日の社会問題についても、授業内のディスカッションを通して議論する。(英語開講科目)

教養特論：環境 (Special Lecture: Environment)

未定 2-0-0 4Q

地球環境問題をはじめ現代社会には深刻な課題が山積みだが、これらの諸問題に向き合い、各人なりに少しでも良い方向へと動いていく力は、どのように得られるのだろうか。「誰かにやってほしい」という受動的な希望ではなく、自ら創りたい未来を描き参画していく積極的な希望、「アクティブ・ホープ」を育みたい。アメリカから世界に広がったジョアンナ・メイシーらの「つながりを取り戻すワーク」を学び、転換期を生きる拠り所、「深いやすらぎ・大きな勇氣」を探る。

ねらいは、環境など世界の諸課題に対して、きちんと現実を見つめ、どんな時にも希望を失わずに前向きに動け、人生と社会を豊かにする力を身につけること。

教養特論：都市 (Special Lecture: Urban Space for the Future)

木内 久美子 准教授 2-0-0 4Q

未来都市像はどうあるべきか、また科学者はその実現のために何ができるのか。毎週のリーディング・ディスカッション課題をとおして、参加学生がそれぞれの専門領域についての知識を共有しながら、未来都市像をつくりあげていく。授業はワークショップ形式で行われる。（英語開講課目）

教養特論：医療（Special Lecture: Medical Care）

未定 2-0-0 4Q

（概要） 少子高齢化が進む中で、健康と長寿に対する関心は日増しに高まっている。人々の健康を維持するためには、医療の役割は大きい。家族の働き手や子どもの健康を維持するためにも、引退した高齢者の健康を維持するためにも、人々の特徴とニーズに合わせた医療の提供が必要であり、そのための医療制度の整備と医療サービス提供の仕組みづくり及びこれらの制度運営などが重要である。この講義では、我が国の医療保険制度や医療提供体制とその運営の基本的な仕組みについて講義を行い、必要に応じて他の先進諸国の医療制度との比較を行う。

（ねらい） 医療に対するニーズは、人々の年齢や暮らし向き、働き方と収入、現役か引退した高齢者かで異なり、多様な側面をもつ。そのような多様な医療ニーズに応えるために、政府や地方自治体は、医療制度を整備し制度運営を行っている。また、働く人々の健康を維持するために、企業もまた健康保険組合を通じて医療の提供に関わっている。このような医療の仕組みと医療の役割を知ることにより、社会の仕組みや企業活動との関係を視野に入れながら、本人の健康維持・増進のみならず、企業で働く人々と家族の健康維持・増進について理解を深めることが可能になる。

教養特論：東南アジア（Special Lecture: Southeast Asia）

堀場 明子 非常勤講師 1-0-0 3Q

本講義は、日本との関係が深い東南アジア諸国についての理解を促すものである。東南アジア地域の人々と社会、政治、文化について、さまざまな角度から概観する。植民地支配の歴史、国民国家の形成、開発独裁体制、環境問題など実社会における問題と密接にかかわるテーマを取り上げる。

本講義のねらいは、グローバル社会で生きる上で必須となっている異文化理解の促進と、違いを受け入れる寛容の精神の醸成である。東南アジアを知ることを通して、多様な生き方、考え方を知り、他者との協働につなげてほしい。

教養特論：紛争と平和構築（Special Lecture: Conflicts and Peace Agreement）

（平成 30 年度は休講）

未定 1-0-0 3Q

メディア論 C（Media Studies C）

柳瀬 博一 教授 2-0-0 2Q

本講義では、現代メディアの基礎教養を学んだ上で、「理系の仕事」としてのメディアビジネスについて考察する。

一般にメディアビジネスは、放送番組の制作、新聞記事の取材執筆、書籍の編集、小説の執筆といったメディアコンテンツを作ること、文系や芸術系の仕事、と認識されやすい。けれども、こうしたコンテンツを支えるメディアそのものは基本的に理系の仕事で成り立っている。出版は印刷技術が支えており、放送は通信技術の賜物である。テレビの基礎技術を世界最初に開発したのは、東工大の前身である東京高等工業学校の卒業生である高柳健次郎氏であり、ゲームで知られる任天堂の中興の祖、岩田聡元社長も東工大 OB のプログラマーである。

メディアコンテンツがデジタル化し、メディアの主戦場がインターネットに移ったいま、メディアビジネスは、基礎技術からコンテンツの制作にいたるまで、理系が主役となりつつある。

本講義では、メディアの基礎教養を学んだのちに、現在のメディアビジネスの最新事例をとりあげ、未来のメディアに

理系の仕事はどう役立てるかを考察する。メディアビジネスの経営や制作にかかわる当事者をゲストに招く予定である。

表象文化論 C (Studies of Culture and Representation C)

北村 匡平 准教授 2-0-0 2Q

私たちの日常生活はかつてないほど「映像」に取り囲まれている。映画やテレビだけではなく、ワンセグや PC、モバイルや電子広告など「スクリーン」は日常に遍在し、私たちはなかば無意識に映像が作り出す〈意味〉を受け取っている。だが、常に身近にある「映像」は、その親しみやすさゆえに、いかに私たちの情動に作用しているのかを思考する態度を希薄化させている。

本講義では、映画を中心とした視聴覚メディアの独特な表現形式を理解したうえで、なぜその表現が人びとを魅了するのかを探究していく。そのために映像を演出、撮影、編集、音響／視覚効果、演技などの構成要素に分解し、多角的に表現技法を捉える。取りあげる映像は、ハリウッド映画や日本映画、ヨーロッパの映画が中心となるが、アニメーション映画やドラマの表現も適宜、参照する。この授業では、①20 世紀の映像表現の多様性を理解すること、②映像作品を批評する力を養うことを目標としている。一方的な講義ではなく、映像表現を思考する時間を設けるので、積極的な参加が求められる。

人文学系ゼミ（自分発見、社会・文化・人間探求セッション）導入 1

(Seminar on Humanities(Culture, Society and Humanity)Introduction1)

上田 紀行 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（自分発見、社会・文化・人間探求セッション）導入 2

(Seminar on Humanities(Culture, Society and Humanity)Introduction2)

上田 紀行 教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（参加と協働と至福の場づくり）導入 1

(Seminar on Humanities(Facilitating dialogue, collaboration, and bliss)Introduction 1)

中野 民夫 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（参加と協働と至福の場づくり）導入 2

(Seminar on Humanities(Facilitating dialogue, collaboration, and bliss)Introduction2)

中野 民夫 教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（創造と思考のレッスン）導入 1 (Seminar on Humanities(Art workshop)Introduction 1)

伊藤 亜紗 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（創造と思考のレッスン）導入 2 (Seminar on Humanities(Art workshop)Introduction 2)

伊藤 亜紗 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（現代宗教／スピリチュアリティ論）導入 1

(Seminar on Humanities(Religion and Spirituality in Contemporary Society)Introduction 1)

弓山 達也 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（現代宗教／スピリチュアリティ論）導入 2

(Seminar on Humanities(Religion and Spirituality in Contemporary Society)Introduction 2)

弓山 達也 教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（博物館と歴史学）導入 1 (Seminar on Humanities(Museum and History)Introduction 1)

福留 真紀 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（博物館と歴史学）導入 2 (Seminar on Humanities(Museum and History)Introduction 2)

福留 真紀 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

社会科学系ゼミ（法学ゼミ）導入 1

(Seminar on Social Sciences (Japanese Law Study Seminar)Introduction 1)

金子 宏直 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（法学ゼミ）導入 2

(Seminar on Social Sciences (Japanese Law Study Seminar)Introduction 2)

金子 宏直 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

社会科学系ゼミ（政策とメディアの社会学）導入 1

(Seminar on Social Sciences(Sociology of media and governance)Introduction 1)

西田 亮介 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（政策とメディアの社会学）導入 2

(Seminar on Social Sciences(Sociology of media and governance)Introduction 2)

西田 亮介 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

社会科学系ゼミ（日米関係と沖縄）導入 1

(Seminar on Social Science(US-Japan Relations: Military Base Problem in Okinawa)Introduction 1))

川名 晋史 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（日米関係と沖縄）導入 2

(Seminar on Social Science(US-Japan Relations: Military Base Problem in Okinawa)Introduction 2))

川名 晋史 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

融合系ゼミ（意思決定論）導入 1

(Seminar on Transdisciplinary Studies (Decision Making)Introduction1)

猪原 健弘 教授 0-2-0 1Q, 2Q

融合系ゼミ（意思決定論）導入 2

(Seminar on Transdisciplinary Studies (Decision Making)Introduction2)

猪原 健弘 教授 0-2-0 3Q, 4Q

融合系ゼミ（歴史における科学・技術）導入 1

（平成 30 年度は休講）

(Seminar on Transdisciplinary Studies(Science and Technology in History)Introduction1)

未定 0-2-0 1Q, 2Q

融合系ゼミ（歴史における科学・技術）導入 2

（平成 30 年度は休講）

（Seminar on Transdisciplinary Studies(Science and Technology in History)Introduction2）

未定 0-2-0 3Q, 4Q

融合系ゼミ（「Well-being（よく生きること）」の科学と教育）導入 1

（Seminar on Transdisciplinary Studies(Scientific studies on "well-being" and positive education)Introduction1）

札幌 順 教授 0-2-0 1Q, 2Q

融合系ゼミ（「Well-being（よく生きること）」の科学と教育）導入 2

（Seminar on Transdisciplinary Studies(Scientific studies on "well-being" and positive education)Introduction2）

札幌 順 教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（自分発見，社会・文化・人間探求セッション） 1， 3， 5

（Seminar on Humanities(Culture, Society and Humanity) 1, 3, 5）

上田 紀行 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（自分発見，社会・文化・人間探求セッション） 2， 4， 6

（Seminar on Humanities(Culture, Society and Humanity) 2, 4, 6）

上田 紀行 教授 0-2-0 3Q, 4Q

各自が自分自身の問題意識に基づくテーマで 2～30 分くらいの発表を行い、それについてゼミ生全員でディスカッションを行います。テーマは、社会、文化、人間に関することならば何でも。これまでも、格差問題、国際援助、政治のあり方といった社会的なテーマから、恋愛、映画、サークル内の人間関係といった身近なテーマまで、様々なテーマが深く語り合われてきました。

学期中に数コマを続けての集中ゼミを数回、そして前期は夏休み中、後期は春休み中に一泊二日のゼミ合宿を行います。

自分の発表を準備し、発表することで、また他の人の発表を聞くことで、プレゼンテーション能力が格段に向上します。また多様なテーマの発表に触れることで、世界が広がり、様々な分野へのアクセスが可能になります。自分とは異なる思考法、感性を持った人たちと深く語り合うことで、自己探求が進み、また深い議論ができる仲間を作ることができます。

人文学系ゼミ（参加と協働と至福の場づくり） 1， 3， 5

（Seminar on Humanities(Facilitating dialogue, collaboration, and bliss) 1, 3, 5）

中野 民夫 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（参加と協働と至福の場づくり） 2， 4， 6

（Seminar on Humanities(Facilitating dialogue, collaboration, and bliss) 2, 4, 6）

中野 民夫 教授 0-2-0 3Q, 4Q

この世に生まれた一人の人間としての幅広い成長を目指し、「参加と協働と至福の場づくり」をテーマに、学び合いのコミュニティを育みたい。

具体的に体験を通して学びたいことは二つ。ひとつは、ワークショップや創造的な対話をファシリテート（促進）する参加型の場づくりの技法。それぞれの思いや知恵を引き出し、相互作用の中で大きな学びや創造へと展開するファシリテーターのスキルとところを、身につけていく。もうひとつは、ホリスティックな人間力。身体を調え、呼吸を調え、心を調え、今ここに集中できるマインドフルネスを養う。

人文学系ゼミ（創造と思考のレッスン） 1, 3, 5 (Seminar on Humanities(Art workshop) 1, 3, 5)

伊藤 亜紗 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

この講義では、芸術祭等へのフィールドワークを行います。大学の教室での学びを離れ、自分の体と心を動かしながら、発想の引き出しをふやすことをめざします。本年度は、夏休みに2泊3日で、瀬戸内国際芸術祭に行きます。

人文学系ゼミ（創造と思考のレッスン） 2, 4, 6 (Seminar on Humanities(Art workshop) 2, 4, 6)

伊藤 亜紗 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

この講義では、冬休み中の5日間の集中講義で行い、毎日異なる課題（例：キャンパス内に異空間を作れ）に対して作品の制作を行い、その後でじっくり講評を行います。自分の体と心を動かしながら、発想の引き出しをふやすことをめざします。

人文学系ゼミ（現代宗教／スピリチュアリティ論） 1, 3, 5

(Seminar on Humanities(Religion and Spirituality in Contemporary Society) 1, 3, 5)

弓山 達也 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（現代宗教／スピリチュアリティ論） 2, 4, 6

(Seminar on Humanities(Religion and Spirituality in Contemporary Society) 2, 4, 6)

弓山 達也 教授 0-2-0 3Q, 4Q

このゼミでは宗教学の基本的な考え方を学びつつ、特に新宗教、カルト、宗教と暴力、スピリチュアリティの問題を取り上げて、理解を深めていくことを目的とする。そのためゼミでは現代宗教に関するテキストを読み、議論を行い、現地研究を実施する。

人文学系ゼミ（博物館と歴史学） 1, 3, 5 (Seminar on Humanities(Museum and History) 1, 3, 5)

福留 真紀 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（博物館と歴史学） 2, 4, 6 (Seminar on Humanities(Museum and History) 2, 4, 6)

福留 真紀 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

本物に触れ、現場に立つ、をモットーに、歴史学と向き合います。自ら前近代の日本にアクセスできるように、古文書読解能力を身に付けるため、ゼミでは史料の輪読にも取り組みます。また、博物館での授業を複数回行う予定です。

社会科学系ゼミ（法学ゼミ） 1, 3, 5 (Seminar on Social Sciences(Japanese Law Study Seminar) 1, 3, 5)

金子 宏直 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（法学ゼミ） 2, 4, 6 (Seminar on Social Sciences(Japanese Law Study Seminar) 2, 4, 6)

金子 宏直 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

文系ゼミ（法学等）の後継。法律学の教科書等、論文、判例・事例等をもとに議論を通じて学習を深める。

社会科学系ゼミ（政策とメディアの社会学） 1, 3, 5

(Seminar on Social Sciences(Sociology of media and governance) 1, 3, 5)

西田 亮介 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（政策とメディアの社会学） 2, 4, 6

(Seminar on Social Sciences(Sociology of media and governance) 2, 4, 6)

西田 亮介 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

政策研究, メディア研究, ガバナンス研究, 社会課題解決の理論と実践等について, 各自の問題意識に基づき, 広く学際的なアプローチで探求する。

また関連して必要な, 社会学, 政治学, 行政学, 政策研究, メディア論の文献購読を通じて, 問題意識, 社会科学的思考を深化させる。必要に応じて, 研究, 実践のプロジェクト等に取り組む。

社会科学系ゼミ (日米関係と沖縄) 1, 3, 5

(Seminar on Social Science(US-Japan Relations: Military Base Problem in Okinawa) 1, 3, 5))

川名 晋史 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ (日米関係と沖縄) 2, 4, 6

(Seminar on Social Science(US-Japan Relations: Military Base Problem in Okinawa) 2, 4, 6))

川名 晋史 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

在日米軍基地の問題を通して, 日本の安全保障, そして国際社会が抱える問題を考察する。

授業は受講者が主体となって進められる。各人が持ち回りで, 具体的なテーマについてリサーチとプレゼンテーションを行う。

ディスカッションに求められるのは建設的な「批判」である。問題点をあぶり出し, それを論理的に分析・議論する技術を養う。

融合系ゼミ (意思決定論) 1, 3, 5 (Seminar on Transdisciplinary Studies(Decision Making) 1, 3, 5)

猪原 健弘 教授 0-2-0 1Q, 2Q

融合系ゼミ (意思決定論) 2, 4, 6 (Seminar on Transdisciplinary Studies(Decision Making) 2, 4, 6)

猪原 健弘 教授 0-2-0 3Q, 4Q

受講生は, 担当教員と協議して決定した意思決定論に関する課題に取り組む。文献等の調査を通じて課題に関連する事項の理解を深め, 討論などを通じて問題を明確化し, 解決を図る。課題に取り組むこれらの過程において, それまで学修してきた様々な科目によって身に付けた専門知識及び周辺の基礎知識等を活用して問題を解決する手法を身に付ける。また, データの取得, 取得したデータの解析とその考察といった手法に習熟するとともに, 複眼的に事物を観る力を養成する。さらに, 得られた成果をまとめて報告書を作成し, 発表・討論を行う。

融合系ゼミは, 学生個々が特定の課題に取り組む研究室教育の中核をなすものであり, 体系的カリキュラムに基づくコースワークと相互補完の関係にある。課題に取り組むことにより, 意思決定論に関する専門力の向上とともに, 新たな課題・問題を発見・設定する力, 未解決の問題を解決に導く力など, 社会で必要とされる総合的な開発力を身につけることが期待される。

融合系ゼミ (歴史における科学・技術) 1, 3, 5 (平成 30 年度は休講)

(Seminar on Transdisciplinary Studies(Science and Technology in History) 1, 3, 5)

未定 0-2-0 1Q, 2Q

融合系ゼミ (歴史における科学・技術) 2, 4, 6 (平成 30 年度は休講)

(Seminar on Transdisciplinary Studies(Science and Technology in History) 2, 4, 6)

未定 0-2-0 3Q, 4Q

融合系ゼミ（「Well-being（よく生きること）」の科学と教育） 1, 3, 5

(Seminar on Transdisciplinary Studies(Scientific studies on "well-being" and positive education) 1, 3, 5)

札幌 順 教授 0-2-0 1Q, 2Q

本科目では、倫理の原点に立ち返り、人が「よく生きること (well-being)」ことについて、文系・理系の枠を越えて、超際的に検討する。また、最近、国連などでも注目されている「徳倫理学 (virtue ethics)」の組織運営への活用方法及び、「志向倫理」を重視する倫理教育・研修のあり方を具体的・実証的に考察する。同時に、「よく生きること (幸 せ)」に関する最新の科学的知見を、所謂、ポジティブ心理学や「幸福の経済学」、脳神経科学などの学術領域から学び、自らの「well-being」を向上させる方法、並びに人と組織がより「よく生きること」を促す倫理プログラムのあり方について調査・研究する。

融合系ゼミ（「Well-being（よく生きること）」の科学と教育） 2, 4, 6

(Seminar on Transdisciplinary Studies(Scientific studies on "well-being" and positive education) 2, 4, 6)

札幌 順 教授 0-2-0 3Q, 4Q

科学技術と社会・環境との関係を歴史的・多面的に考察し、現代の高度科学技術社会における科学者・技術者として重視すべき価値を共有する必要性を理解する。科学者・技術者が直面する可能性のある倫理問題を疑似体験し、倫理的意思決定の手法を学ぶ。科目全体を通して、「やってはならない」ことを強調する予防倫理だけでなく、科学者・技術者として「何ができるのか」を考える志向倫理を重視する。また、倫理的科学者・技術者が、社会の福利に貢献するだけでなく、自らの「よく生きること (well-being)」を高めることができることを理解する。加えて、組織において科学者・技術者がいかに行動すべきかを具体的な事例をとおして検討する。